

第2回 第1章 古代国家の形成と貴族文化の誕生

弥生文化と小国家の形成

執筆・講師
武藤正人

学習のねらい

日本列島における水稲耕作の広がりや金属器の使用が、その後の社会に及ぼした影響について考察する。その際、複数の資料を活用し、それまでの時代と具体的に比較することを通して、弥生文化の特色を表現する。また、小国家の形成や邪馬台国の成立について、大陸との関係に注目し、中国の歴史書をはじめ、地図や年表、遺構や遺物などの資料を活用して多面的・多角的に考察する。

弥生文化

紀元前4世紀ごろ、中国大陸から日本列島の九州北部に渡来した人々によって、水稲耕作（稲作）と金属器（鉄器・青銅器）が伝えられた。水稲耕作をおもな生業とし、金属器や弥生土器の使用を特色とする文化を弥生文化とよび、以後、紀元3世紀ごろまでを弥生時代という。

最も古い水稲耕作の遺跡である佐賀県の菜畑遺跡では、縄文土器を使用しながら水稲耕作が始まっており、縄文時代晩期にあたるこの時期を弥生時代早期とする考えもある。

弥生時代の水稲耕作では木製の鋤や鋤など、米作りの農具が使用され、収穫は石包丁による穂首刈りが行われた。土器は壺や甕、高坏など、縄文土器に比べて薄手で硬い弥生土器が使用され、貯蔵用の高床倉庫などもつくられた。

九州北部で始まった水稲耕作は、やがて九州南部から東北地方まで各地に広まったが、北海道では続縄文文化、南西諸島では貝塚文化と呼ばれる食料採取文化が続いた。また、水稲耕作が始まって、狩猟や採集で得られる獣肉や木の実などが大切な食材であることに変わりはない。

日本列島には鉄器と青銅器がほぼ同時に伝わったが、銅鐸などの青銅器は、祭祀の道具として使用されたと考えられる。銅鐸には水稲耕作に関する絵画が描かれたものもあり、弥生時代の人々の生活を知る手がかりとなっている。

小国の分立と大陸との関係

水稲耕作によって食料の余剰が生まれ、蓄積ができるようになると、貧富の差が生じ、身分の区別が起こってきた。集落のリーダーは、共同作業を指導したり、儀礼をつかさどったりしながら、集落同士の争いでは戦闘の指揮もとり、次第に人々を支配するようになったと考えられる。

弥生時代には、戦いに備えた環濠集落や高地性集落がつくられたり、武器としての弓矢が用いられたりしたが、出土した人骨の中に、金属の武器による傷跡が残るものが見られることから、激しい戦いが行われたことがわかる。こうした戦いを経て成立した小国の中には大陸と交渉をもつものもあったが、そのことは中国の歴史書にも記されている。『漢書』地理志によれば、紀元前1世紀ごろ、倭人は百あまりの国に分かれ、楽浪郡に定期的に使いを送っていたという。ついで、『後漢書』東夷伝には、紀元57年に倭の奴の国王が後漢の皇帝に使者を送り、印綬を受けたと記されている。この時の印（金印）が江戸時代に九州北部で偶然見つかった。歴史書の記述が、考古学上の発見によって裏付けられた一例といえる。『後漢書』はまた、2世紀後半に倭国が大いに乱れ、国々が互いに争ったと伝えている。

渡来人が弥生文化をもたらした時期、中国では500年以上続いた戦乱の末、紀元前221年に秦が中国を統一した。弥生文化成立の背景には、戦乱を避けて日本列島に渡来した人々や、新天地での経済活動を求めて渡来した人々などがいたと考えられる。

邪馬台国

中国の三国時代について記した歴史書である『魏志』倭人伝によれば、2世紀後半ごろからはげしくなった倭国の大乱は、3世紀はじめ、卑弥呼という女性を王に立てることによっておさまったという。卑弥呼は倭の国々が共立した王で、彼女が女王としておさめた国が邪馬台国である。卑弥呼は、邪馬台国を中心に約30の国々を支配したという。

卑弥呼には、呪術を用いて宗教的な儀式を行う司祭者としての側面と、魏の皇帝の権威を借りて国内をおさめ、狗奴国との対立で優位に立とうとする政治家としての側面があった。魏にとっては、対立する呉をけん制する意味もあり、卑弥呼に「親魏倭王」の厚遇を与えたとする考えもある。

邪馬台国の所在地については、歴史学や考古学だけでなく、広い分野も交えて長い論争が続いているが、いまだ確実な証拠が得られておらず、結論は出ていない。多くの候補地のうち、現在は近畿説と九州説が有力であり、近畿説を裏付ける上では纏向遺跡が、九州説の裏付けとしては吉野ヶ里遺跡が注目されている。いずれも巨大な建物跡が発見されており、『魏志』倭人伝の記述との関係などをめぐり、さまざまな議論が展開されている。邪馬台国の所在地論争は、のちの大和王権の成立、すなわち古代国家の成り立ちとも深く関わっているため、今後も議論をよぶこととなる。